

令和2年度

国語

時間 50分 100点満点

受験上の注意

1. 問題用紙・解答用紙には、受験番号を記入してください。
2. 解答はすべて解答用紙に記入してください。記入の方法を誤ると得点になりません。
3. 試験終了の合図とともに、問題用紙・解答用紙を提出してください。

東京女子学園高等学校

一 次のカタカナを漢字に直し、漢字は読みをひらがなで答えなさい。

- 1 寒いのでダンボウを入れる
- 2 谷に橋をかける
- 3 レイトウ食品をあたたためる
- 4 ボウシをかぶる
- 5 水面に月がウツる
- 6 経験が乏しい
- 7 被害を免れる
- 8 目の錯覚だ
- 9 不朽の名作
- 10 矛先をかわず

二 次の1 2の文章を読み、後の問いに答えなさい。

部は2で話題になった箇所です。

1 趙の邯鄲の都に住む紀昌という男が、天下第一の弓の名人になろうと志を立てた。己の師と頼むべき人物を物色するに、当今弓矢をとつては、名手・飛衛に及ぶ者があるとは思われぬ。百歩を隔てて柳葉を射るに百発百中するという達人だそうである。紀昌は遙々飛衛をたずねてその門に入った。

飛衛は新入の門人に、先ず瞬きせざることを学べと命じた。紀昌は家に帰り、妻の機織台の下に潜り込んで、そこに仰向けにひっくり返った。眼とすれすれに機躡(機織りの道具。機のあぜを上下させる上板)が忙しく上下往来するのをじつと瞬かずに見詰めていようという工夫である。理由を知らない妻は大いに驚いた。第一、妙な姿勢を妙な角度から良人に視かれては困るという。厭がる妻を紀昌は叱りつけて、無理に機を織り続けさせた。来る日も来る日も彼はこの可笑しな恰好で、瞬きせざる修練を重ねる。二年の後には、遽だしく往返する牽挺(機織りの道具。機のあぜを上下させる下板)が睫毛を掠めても、絶えて瞬くことがなくなった。彼はようやく機の下から匍出す。1 鋭利な錐の先をもつて脛を突かれても、まばたきをせぬまでになっていた。不意に火の粉が目に入ろうとも、目の前に突然灰神楽(灰の中に湯水がこぼれ、灰の舞い上がる。灰の煙)が立とうとも、彼は決して目をパチつかせない。彼の脛はもはやそれを閉じるべき筋肉の使用法を忘れ果て、夜、熟睡している時でも、紀昌の目はクワッと大きく見開かれたままである。2 彼の目の睫毛と睫毛との間に小さな一匹の蜘蛛が巣をかけるに及んで、彼はよう

やく自信を得て、師の飛衛にこれを告げた。

1 それを聞いて飛衛がいう。瞬かざるのみでは未だ射を授けるに足りぬ。次には、視ることを学べ。視ること
2 とに熟して、さて、小を視ること大のごとく、微を見ること著のごとく(あきらか、はっきりと) なったな

らば、来つて我に告げるがよいと。

紀昌は再び家に戻り、肌着の縫目から虱を一匹探し出して、これを己が髪の毛をもって繫いだ。そうして、それを南向きの窓に懸け、終日睨み暮らすことにした。毎日々々彼は窓にぶら下った虱を見詰める。初め、もちろんそれは一匹の虱に過ぎない。二三日たつても、依然として虱である。

3

十日余り過ぎ

ると、気のせいか、どうやらそれがほんの少しながら大きく見えて来たように思われる。三月目の終りには、明らかに蚤ほどの大きさに見えて来た。虱を吊るした窓の外の風物は、次第に移り変わる。熙々として（やわらかく）照っていた春の陽は何時か烈しい夏の光に変わり、澄んだ秋空を高く雁が渡つて行つたかと思うと、はや、寒々とした灰色の空から雲が落ちかかる。紀昌は根気よく、毛髪の先にぶら下つた有吻類・催眠性（かゆみをもよおす）の小節足動物を見続けた。その虱も何十匹となく取換えられて行く中に、早くも二年の月日が流れた。或日ふと気が付くと、窓の虱が馬のような大きさに見えていた。占めたと、紀昌は膝を打ち、表へ出る。彼は我が目を疑つた。人は高塔であつた。馬は山であつた。豚は丘の如く、鶏は城楼と見える。雀躍して家にとつて返した紀昌は、再び窓際の虱に立向い、燕角の弧に朔達のやがら（獣の角で作つた弓とよもぎで作つた矢の幹）をつがえてこれを射れば、矢は見事に虱の心の臓を貫いて、

4

虱を繫いだ毛さえ断れぬ。

紀昌は早速師の許に赴いてこれを報ずる。飛衛は高蹈して（足を踏み鳴らして）胸を打ち、初めて「出かしたぞ」と褒めた。

5

直ちに射術の奥儀秘伝を剃すところなく紀昌に授け始めた。目の基礎訓練に

あ

かけた甲斐があつて紀昌の腕前の上達は、驚く程速い。

奥儀伝授が始まつてから十日の後、試みに紀昌が百歩を隔てて柳葉を射るに、既に百発百中である。二十日の後、いっばいに水を湛えた盃を右腕の上に載せて剛弓を引くに、狙いに狂いの無いのは固より、杯中の水も微動だにしない。一月の後、百本の矢をもつて速射を試みたところ、第一矢が的に中れば、続いて飛来つた第二矢は誤たず第一矢の括（矢の上端の、弓の弦を受けるところ）に中つて突き刺さり、更に間髪を入れず第三矢の鏃が第二矢の括にガツシと喰い込む。矢矢相属し、発発相及んで（矢をあたかも一本にみえるごとく、すばやく連射すること）、後矢の鏃は必ず前矢の括に喰入るが故に、絶えて地に墜ちることがない。瞬く間に、百本の矢は一本の如くに相連なり、的から一直線に続いたその最後の括はなお弦を銜むが如くに見える。傍で見ていた師の飛衛も思わず「善し！」と言つた。

二月の後、たまたま家に帰つて妻といさかひをした紀昌がこれを威そうとて烏号の弓に（名弓の別称）綦衛（すぐれた矢の産地）の矢をつがえきりりと引絞つて妻の目を射た。矢は妻の睫毛三本を射切つて彼方へ飛び去つたが、射られた本人は一向に気づかず、まばたきもしないで亭主を罵り続けた。蓋し、彼の至芸による矢の速度と狙いの精妙さとは、実にこの域にまで達していたのである。

最早師から学び取るべき何も無くなつた紀昌は、或日、ふと良からぬ考えを起した。

彼がその時独りつくづくと考えるには、今や弓をもつて己に敵すべき者は、師の飛衛を置いて外に無い。天下第一の名人となるためには、どうあつても飛衛を除かねばならぬと。秘かにその機会を窺っている中に、

一日偶々郊野に於て、向うからただ一人歩み来る飛衛に出遇った。咄嗟に意を決した紀昌が矢を取って狙いをつければ、その氣配を察して飛衛もまた弓を執つて相應する。二人互いに射れば、矢はその度に中道にして相寄り、共に地に墜ちた。地に落ちた矢が輕塵をも揚げなかつたのは、兩人の技がいずれも神に入つていた（人間業とは思えない領域にまで達している）からである。さて、飛衛の矢が尽きた時、紀昌の方は尚一矢を余していた。得たりと勢込んで紀昌がその矢を放てば、飛衛は咄嗟に、傍なる野茨の枝を折り取り、その棘の先端をもつてハッシと鏃を叩き落した。ついに非望（身分不相応の望み）の遂げられないことを悟つた紀昌の心に、成功したならば決して生じなかつたに違いない道義的慚愧の念（恥じ入る思い）が、この時忽焉（たちまち）として湧起つた。飛衛の方では、また、危機を脱し得た安堵と己が伎倆についての満足とが、敵に対する憎しみをすっかり忘れさせた。二人は互いに駆寄ると、野原の真中に相抱いて、しばし美しい師弟愛の涙にかきくれた。

（中略）

涙にくれて相擁（互いに抱き合う）しながらも、再び弟子がかかる企みを抱くようなことがあつては甚だ危いと思つた飛衛は、紀昌に新たな目標を与えてその氣を転ずるに如くはないと考えた。彼はこの危険な弟子に向つて言つた。もはや、伝うべきほどのことは悉く伝えた。汝がもしこれ以上この道の蘊奥（奥義・極意）を極めたいと望むならば、ゆいて西の方大行の嶮に攀じ、霍山の頂を極めよ。そこには甘蠅老師とて古今を曠しゆうする斯道（古今に例をみないほどのその方面）の大家がおられる筈。老師の技に比べれば、我々の射のごときは殆ど児戯に類する。汝の師と頼むべきは、今は甘蠅師の外にあるまいと。

紀昌は直ぐに西に向つて旅立つ。その人の前に出ては我々の技の如き児戯にひとしいと言つた師の言葉が、彼の い にこたえた。もしそれが本当だとすれば、天下第一を目指す彼の望も、まだまだ前途遠い訳である。己が業が う に類するかどうか、とにもかくにも早くその人に会つて腕を比べたいとあせりつつ、彼はひたすらに道を急ぐ。足裏を破り脛を傷つけ、危巖を攀じ棧道（絶壁から絶壁へ渡した橋の道）を渡つて、一月の後に彼はようやく目指す山顛（山頂）に辿りつく。

氣負い立つ紀昌を迎えたのは、羊のような柔和な目をした、しかし酷くよぼよぼの爺さんである。年齢は百歳をも超えていよう。腰の曲つているせいもあつて、白髯（白い頬ひげ）は歩く時も地に曳きずつている。相手が聾（耳の聞こえないこと）かも知れぬと、大声に遽だしく紀昌は来意を告げる。己が技の程を見て貰いたい旨を述べると、あせり立つた彼は相手の返辞をも待たず、いきなり背に負うた楊幹麻筋の弓（カワヤナギの幹に麻糸をまいた強い弓）を外して手に執つた。そうして、石碣の矢（越王が用いた矢の名前）をつがえると、折から空の高くを飛び過ぎて行く渡り鳥の群に向つて狙いを定める。弦に應じて、一箭（一本の矢）忽ち五羽の大鳥が鮮やかに碧空を切つて落ちて来た。

一通り出来るようじゃな、と老人が穏かな微笑を含んで言う。だが、それは所詮射之射というもの、好漢（立派な男、あなた）未だ不射之射を知らぬと見える。

ムツとした紀昌を導いて、老隠者は、其処から二百歩ばかり離れた絶壁の上まで連れて来る。脚下は文字

通りの屏風のごとき壁立千仞（断崖が屏風のように切りたち、非常に深い谷）、遙か真下に糸のような細さに見える溪流を一寸覗いただけで忽ち眩暈を感じる程の高さである。その断崖から半ば宙に乗出した危石の上につかつかと老人は駈上り、振返つて紀昌に言う。どうじゃ。この石の上で先刻の業を今一度見せてくれぬか。今更引込もならぬ。老人と入代りに紀昌がその石を履んだ時、石は微かにグラリと揺らいだ。強いて気を励まして矢をつがえようとすると、ちようど崖の端から小石が一つ転がり落ちた。その行方を目で追うた時、覚えぬ紀昌は石上に伏した。脚はワナワナと顫え、汗は流れて踵（かかと）にまで至つた。老人が笑いながら手を差し伸べて彼を石から下し、自ら代つてこれに乗ると、では射というものをお目にかけてようかな、と言つた。まだ動悸がおさまらず蒼ざめた顔をしてはいたが、紀昌は直ぐに気が付いて言つた。しかし、弓はどうなさる？ 弓は？ 老人は素手だつたのである。弓？ と老人は笑う。弓矢の要る中はまだ射射射じゃ。不射之射には、烏漆（黒漆）の弓も肅慎（中国古代の北方民族）の矢もいらぬ。

ちようど彼等の真上、空の極めて高い所を一羽の鳶が悠々と輪を画いていた。その胡麻粒ほどに小さく見える姿をしばらく見上げていた甘蠅が、やがて、見えざる矢を無形の弓につがえ、満月の如くに引絞つてひよう、と放せば、見よ、鳶は羽ばたきもせず中空から石の如くに落ちて来るではないか。

紀昌は凜然とした。今にして始めて芸道の深淵を覗き得た心地であつた。

九年の間、紀昌はこの老名人の許に留まつた。その間如何なる修業を積んだものやらそれは誰にも判らぬ。九年たつて山を降りて来た時、人々は紀昌の顔付の變つたのに驚いた。以前の負けず嫌いな精悍な面魂は何処かに影をひそめ、何の表情も無い、木偶（木彫りの人形）の如く愚者の如き容貌に變つてゐる。久しぶりに旧師の飛衛を訪ねた時、しかし、飛衛はこの顔付を一見すると感嘆して叫んだ。これでこそ初めて天下の名人だ。我儕の如き、足下にも及ぶものでないと。

邯鄲の都は、天下一の名人となつて戻つて来た紀昌を迎えて、やがて眼前に示されるに違ひないその妙技への期待に湧返つた。

ところが紀昌は一向にその要望に應えようとしない。いや、弓さえ絶えて手に取ろうとしない。山に入る時に携えて行つた楊幹麻筋の弓もどこかへ棄てて来た様子である。そのわけを訊ねた一人に答えて、紀昌は懶げに言つた。至為は為す無く、至言は言を去り、至射は射ることなしと。成程と、至極物分りのいい邯鄲の都人士は直ぐに合点した。弓を執らざる弓の名人は彼等の誇となつた。紀昌が弓に触れなければ触れないほど、彼の無敵の評判は愈々喧伝された。

様々な噂が人々の口から口へと伝わる。毎夜三更（今のおよそ午後十一時から午前一時）を過ぎる頃、紀昌の家の屋上で何者の立てるとも知れぬ弓弦の音がする。名人の内に宿る射道の神が主人公の睡っている間に体内を脱け出し、妖魔を払うべく徹宵（夜明かし）守護に當つてゐるのだという。彼の家の近くに住む一商人はある夜紀昌の家の上空で、雲に乗つた紀昌が珍しくも弓を手にして、古の名人・羿と養由基（二人とも弓の名人として名高い）の二人を相手に腕比べをしているのを見たといい出した。その時三名人の放つた矢はそれぞれ夜空に青白い光芒を曳きつつ参宿（オリオン）の三ツ星とその周辺の星と天狼星（大犬座のシリウス）との間に消去つた。紀昌の家に忍び入ろうとしたところ、堀に足を掛けた途端に一道の殺

気が森閑とした家の中から奔り出てまともに額を打つたので、覚えず外に顛落したと白状した盗賊もある。爾来（それより後）、邪心を抱く者共は彼の住居の十町四方は避けて廻り道をし、賢い渡り鳥共は彼の家の上空を通らなくなった。

雲と立置める名声の只中に、名人紀昌は次第に老いて行く。既に早く射を離れた彼の心は、益々枯淡虚静（心に執着やわだかまりがなく静かで落ち着いている）の域にはいつて行ったようである。木偶の如き顔は更に表情を失い、語ることも稀となり、ついには呼吸の有無さえ疑われるに至った。「既に、我と彼との別、是と非との分を知らぬ。眼は耳の如く、耳は鼻の如く、鼻は口の如く思われる。」というのが、老名人晩年の述懐である。

甘蠅師の許を辞してから四十年の後、紀昌は静かに、誠に煙の如く静かに世を去った。その四十年の間、彼は絶えて射を口にすることが無かった。口にさえしなかつた位だから、弓矢を執つての活動などあろう筈が無い。もちろん、寓話作者としてはここで老名人に掉尾（最後）の大活躍をさせて、名人の真に名人たる所以を明らかにしたいのは山々ながら、一方、又、何としても古書に記された事実を曲げる訳には行かぬ。実際、老後の彼については唯無為にして化したとばかりで、次のような妙な話の外には何一つ伝わっていないのだから。

その話というのは、彼の死ぬ一二年前のことらしい。或日老いたる紀昌が知人の許に招かれて行ったところ、その家で一つの器具を見た。確かに見覚えのある道具だが、どうしてもその名前が思い出せぬし、その用途も思い当たらない。老人はその家の主人に尋ねた。それは何と呼ぶ品物で、又何に用いるのかと。主人は、客が冗談を言っているとのみ思って、ニヤリととぼけた笑い方をした。老紀昌は真剣になって再び尋ねる。それでも相手は曖昧な笑を浮べて、客の心をはかりかねた様子である。三度紀昌が真面目な顔をして同じ問を繰返した時、始めて主人の顔に驚愕の色が現れた。彼は客の眼を凝乎と見詰める。相手が冗談を言っているのでもなく、気が狂っているのでもなく、又自分が聞き違えをしているのでもないことを確かめると、彼は殆ど恐怖に近い狼狽を示して、吃りながら叫んだ。

「ああ、夫子（先生、紀昌のこと）が、——古今無双の射の名人たる夫子が、弓を忘れ果てられたとや？ ああ、弓という名も、その使い途も！」

その後当分の間、邯鄲の都では、画家は絵筆を隠し、楽人は瑟（中国古代の弦楽器）の絃を断ち、工匠は規矩（コンパス・物差し）を手にするのを恥じたということである。

はる香 「先生、邯鄲かんたんの画家が絵筆を隠したり、楽人が瑟しつの絃げんを断つたりしたのは、紀昌きしょうの真似をして名人を気取ったつてことですよ」

先生 「うん、そういう読みかたもできるね。すなおに、名人紀昌に憧れて真似したのかもしれないけれど、ハルの言うように自分も名人なんだと世間に宣伝するためと読んだ方が人間臭くていいかも」

はる香 「そうすると、邯鄲の人びとはみんな紀昌が名人だと疑わなかったということになるよね」

先生 「なるね」

はる香 「でもね、だれも、紀昌の名人技を見ていないですよ。『不射之射ふしちのしち』の技を見ていない」

先生 「そうだね『至為しゐは為なす無く、至言は言を去り、至射は射ることなし』という紀昌の言を信じて名人だと思っっている」

はる香 「でしょ。それで『至極物分りのいい邯鄲の都人士は直ぐに合点した』つて書いてある。ここ、怪しいと思うんだ」

先生 「怪しいつて？」

はる香 「わざわざ『至極物分りのいい』つて書いてあるところ。邯鄲の人びとが騙だまされたんだということ、作者が匂わしているんじゃないかかって思うの」

先生 「そうか。それではその後の、『噂うわさ』はどう考えるの？」

はる香 「『噂』だから、真実じゃないとも読めるでしょ」

先生 「そうすると、物語の初めの方の百歩離れて柳の葉を射ることとか、『睫毛まつげと睫毛との間に小さな一匹の蜘蛛くもが巣をかける』なんかも大嘘おおうそになって、というか、確かに大げさで現実にはありえないと思うけれど、それをいったらそもそも物語が成り立たない。

物語や小説にはその世界での現実や真実があるという読み方をしなくてはならないと思うんだ。すると、この『噂』を大嘘でかたづけしてしまうのはちよつとね……」

はる香 「そうか、先生は一応書かれたことはあったこととして読んでみようという立場なんだ」

先生 「もちろん噂だから、さらに大げさになっちゃっているかなとは思うけれど、まったくの嘘うそだとすると、この部分の解釈が宙に浮いちゃうと思うんだよ。

——木偶でいのごとき顔は更に表情を失い、語ることも稀まれとなり、ついには呼吸の有無さえ疑われるに至った。『既に、我と彼との別、是と非との分を知らぬ。眼は耳の如く、耳は鼻の如く、鼻は口の如く思われる。』というのが、老名人晩年の述懐である。——と、

弓矢そのものを忘れてしまった紀昌という妙な話が語られているところ」

はる香 「どうして？ どんなふうに宙に浮いちゃうの？」

先生 「『我と彼の別』がないという境地は、『射之射』と『不射之射』の区別がないということにつながる」と解釈できると思う。つまり……」

はる香 「弓を持つているか、いないかの区別がない」

先生 「そう、そういうこと。すると、その延長上というか更に区別がない先には……」

はる香 「弓矢がなにをする道具かもわからなくなる」

先生 「これらの話は『不射之射』以上の技を持った紀昌の話として語られていると思うんだ。

騙され続ける邯鄲の人びとを擲楡（からかう）する物語だというのは読みすぎだと思うし、文章の構造から言っても、名人の階段を上がっていく紀昌が前半に語られているわけで、その階段がそのまま続いていくと読む方が自然だと思う。

そして、天下一の名人となるには『不射之射』の技を持つ甘蠅老師を超えた境地を示さなくてはならないわけだから、……」

はる香 「うーん。確かに、天下一の名人になるためには甘蠅老師の境地を超えなくちゃいけないよね。でも、⁽¹⁰⁾なんでこの境地が名人なの？……」

先生 「蘇軾そしやくという北宋の文人の言葉に『大智は愚のごとし』というのがある。大変賢い人は一見愚者のように見えるという意味だけれど、こういつた考え方は古代中国の莊子『胡蝶の夢』にもみられて、胡蝶になった夢を見た後、自分が夢で胡蝶になったのか、胡蝶が今夢の中で自分になっているのか疑った——つまり……」

はる香 「二つの事柄がいれかわるといふか、正反対は対極じゃなくて背中合わせ、もつと言えば同じことかな？

紀昌は「是と非との分を知らぬ」とも書かれてるし……だから」

先生 「紀昌の顔付が『木偶の如く愚者の如き容貌』にかわり、それを見た飛衛ひゑいが『天下の名人』だといふのも、この中国の伝統的、道教思想的な考え方の表れだと思ふ」

はる香 「とすると、その伝統的な考えの中で邯鄲の人たちは紀昌を天下一の名人だと認めただ」

先生 「うん、そうなるね。そしてもつと読み込むと天下一の名人は……」

はる香 「愚者でもある。そして、邯鄲の人びとは……」

先生 「騙されたのかもしれないけれど、騙されていないのかもしれない。両者は同じことだから。ハルが言った背中合わせだ。道を究めるとはそんなことかもしれないね」

はる香 「小説って、いろいろな読み方ができるんだ。」

先生 「⁽¹⁵⁾今僕たち二人であるひとつの読み方を考えたけれども、ハルが初めに言った、邯鄲の人々がだまされたという読み方も面白いし、もつと違う読み方もあるだろうね」

はる香 「先生、ありがとう。また一緒に読んでね」

問一

1

2

3

4

5

に入る言葉を次の中からそれ

ぞれ選び、番号で答えなさい。

- 1 そうして
- 2 ところが
- 3 ついに
- 4 もはや
- 5 しかも

問二

①「それを聞いて」

とありますが、どのようなことを聞いたのですか。四十字程度で説明しなさい。

問三

②「未だ射を授けるに足りぬ」

とありますが、射の何を授けられないというのですか。文中から四字の

熟語を抜き出して答えなさい。

問四

③「終日」

④「雀躍して」

⑤「狼狽」

の意味としてふさわしいものを次の中からそれぞれ選び、番号で答えなさい。

- 1 精一杯
- 2 日の沈むころ
- 3 毎日
- 4 真夜中
- 5 一日中

④「雀躍して」

- 1 こおどりして喜んで
- 2 驚愕して
- 3 恐れおののいて
- 4 満足して
- 5 自分の小ささに落胆して

⑤「狼狽」

- 1 驚き嘆くこと
- 2 悲しみ嘆くこと
- 3 あわてふためくこと
- 4 疑問と驚きが合わさったこと
- 5 納得と疑問が合わさったこと

問五

あ

い

に入る言葉を次の中からそれぞれ選び、番号で答えなさい。

あ

- 1 命を
- 2 すべてを
- 3 十日ほど
- 4 五年も
- 5 三年以上

い

- 1 自尊心
- 2 羞恥心
- 3 虚栄心
- 4 出来心
- 5 崇拜心

問六 「矢の速度」「狙いの精妙さ」とありますが、どのように語られていますか。文中からそれぞれ二十字程度で抜き出して答えなさい。

問七 「ふと良からぬ考えを起した」とありますが、どのような考えを起したのですか。文中の言葉を使つて二十五字程度で説明しなさい。

問八 「二人は互いに駈寄ると、野原の真中に相抱いて、しばし美しい師弟愛の涙にかきくれた」とありますが、このような行動に及んだ二人の気持ちの説明としてふさわしいものを次の中から選び、番号で答えなさい。

- 1 紀昌は師を殺そうと思いがついていた自分に気付いて恥じ入り、飛衛は自分の弓の腕前に満足し、紀昌を許そうと思つた。
- 2 紀昌は、天下第一の弓の名手になるために師を屈服させようとたくらんだが、師の技量にたしなめられ自分を恥じた。
- 3 飛衛はとつさの応戦をして助かつた自分の技量に満足し、かつそのような技量向上の機会を作つた紀昌を許すべきだと思つた。
- 4 非望は遂げられないものであることを悟つた紀昌に対して、慈悲の気持ちを忘れないことが弓の名人であり、飛衛はその技量を上げることとそれを示せたと感じた。
- 5 紀昌が技量を挙げたことを師として満足すると共に、飛衛は自分の技量もさらに高まつたことによる満足を味わつた。

問九 「新たな目標を与えて」とありますが、どのような目標を与えたのですか。「」を修めたいと望むことに続くように、文中から十字以内の言葉を抜き出して答えなさい。

問十 に入る二字の熟語を文中から抜き出しなさい。

問十一 「不射之射」とありますが、その意味を説明した次の文のに入る言葉を文中から十五字以内で抜き出しなさい。

て射ること。

問十二 「飛衛はこの顔付を「見すると感嘆して叫んだ。これでこそ初めて天下の名人だ。我儕の如き、足下にも及ぶものでない」とありますが、なぜ、木偶のような顔付をした紀昌を飛衛は天下一の名人と思ったのですか。その説明となる次の文の [] に入る言葉を [2] を参考にして答えなさい。

中国古来の考え方で、 [] は同じことであり、飛衛は紀昌が名人であると思ったから。

問十三 「『嘽』」とありますが、二番目に語られた『嘽』はどのようなものですか。三十五字以内で説明しなさい。

問十四 「この境地」がありますが、どのような境地ですか。「〜という境地」に続くように、「はる香」の言葉を文中から二十字以内で抜き出して答えなさい。

問十五 「今僕たち二人であるひとつの読み方」とありますが、これは紀昌を名人と考える読み方です。なぜ、二人は名人だと読んだのですか。説明しなさい。

